

「からといって」について

山口 佳也*

「からといって」は、本来、いわゆる接続助詞の「から」に「と言って」が付いてできた形であるが、「といて」の意味の形式化の度合い、後続の語句へのかかり方の相違、その他によって、幾つかの種類に分けて考えることができる。本稿では、そのことについて触れ、併せてそれら各種類相互の関係についても考察を加えてみようと思う。

なお、「からとて」「からって」なども、差し支えない限り、同種のものとして扱っていく。

「からといって」は、まず、「といて」の「いう」が本来の“しゃべる”の意味を保持しているものと、それ以外の、形式化した意味を表すに至ったものの二つに大別される。これらを、仮に、それぞれⅠ類、Ⅱ類と呼ぶ。

このうち、Ⅰ類は、
「～から～」と言って
という形の「～から」の後件の部分が省略されて、結果として現出したもので、「から」「といて」ともに本来の性格をほぼそのまま保持した、全体として慣用句化の度合いの少ない形と言える。

Ⅰ類の例としては、次のようなものを挙げることができる。

- ①男は柏屋に三日泊った。宿賃も持っていないことは察しがついたけれど、お滝はあたしがひきうけるからと云って、朝から膳に酒を付けさせ、暇なときは自分が酌をしに坐った。(山本周五郎「金五十両」)
- ②姉たちは またこの次の遊び時間にくるから とい^{って}、(中略)出ていった。(中勘助「銀の匙」)
- ③それゆえ、若子や母には、千葉に手紙を出した日から、軽井沢へ行くことにしたからと云って、支度にかかった。(芹沢光治良「春の谷間」)

ちなみに、これらの場合、それぞれ「～から」のあとに、「任せておいてください」「安心しておいで」「承知しておいてほしい」などといった意味の言葉が省略されていると考えられる。

また、③では「若子や母に～言^{って}」の対応が見られるが、一般に、Ⅰ類の「からと^いって」の「いう」

は、必要に応じ、普通の動詞の「言う」に準じて種々の連用語句を受けると言えそうである。

三

Ⅱ類の「からと^いって」は、更に、「といて」の部分^が逆接の意味でないものと、逆接の意味のものとの二つに分けることができる。これらを、それぞれ、ⅡA類、ⅡB類と呼ぶ。ところが、このⅡ類の用例に実際に当たってみると、用いている当人の意識がどちらにあるかは別として、見方によってⅡA類にもⅡB類にも解し得るものが意外と多いことに気付く。そこで、これを特にⅡA B類と呼んで区別しておくこととする。

ⅡA類の例としては、次のようなものを挙げることができる。

- ④それを金があるからと云ふて無暗にえらがるのは間違つてゐる。(夏目漱石「野分」)
- ⑤何も出来ない百姓の分際で、金があるからと云^{って}、生意気な奴だと思った。(田山花袋「田舎教師」)
- ⑥金がほしいからと云^{って}人を殺し、セックスの不満があるからと云^{って}異性を襲う、というような戦慄すべき現象が続いた後で、いま、日本は急速に昔の秩序に戻りつつある、と言われています。(伊藤整「女性に関する十二章」)
- ⑦千葉はみさ子がお客さまからとて、縁側つきの八畳を提供して、食事も当番制であるが、みさ子には免除した。(「春の谷間」)
- ⑧火傷をしたからって火を恐れても、生きていくにはやっぱり火がなくっちゃあ済まないものだ。(山本周五郎「さぶ」)

ⅡA類は、「といて」の部分の意味が形式化しているのが一つの特徴であるが、それも個々の例によって程度の差があり、中には、Ⅰ類、ⅡA類のどちらに属させるべきか判断に迷う例もある。その意味で、Ⅰ類とⅡA類とは連続的であると言える。

ⅡA類においても、「から」が「理由」の意味あい^で用いられていることは、Ⅰ類の場合と同様であるが、一定の語句が「～から」のあとに省略されていると言えるかどうかはかなりあいまいになっている。その一方、この場合の「～から」は、意味の上で、例えば④では「金があるから」→「(無暗に)えらがる」、⑤では「金があるから」→「生意気だ」、⑥では「金が欲しいから」→「(人)を殺す」といった具合に、「といて」に後続

* 国語国文研究室

する述語との間に原因と帰結の関係をもっているように見える。

ただ、「～から」と、「～から」に意味の形式化した「といて」を付けて「～からといて」(II A類)とした場合とでは、構文論的にかなり大きな相違がある。今

⑩雨が降るから、遠足を中止した連中が映画館へ押し寄せた(注1)。

⑪雨が降るからといて遠足を中止した連中が映画館へ押し寄せた。

の二つの文を比べてみると、⑩の「～から」は「連中」を修飾する連体語句の中に収まらない要素であるのに対し、⑪の「～からといて」は連体語句の中に収まるものとなっている。一般に、「～から」は、特別の場合(注2)を除いて、そのかかりが文末又はそれに準ずる文中の大きな切れ目まで及び、連体語句の中には収まらない(注3)。これに対し、II A類の「～からといて」は連体語句の中にも収まるものであると言ってよさそうである。このことは、④⑤でも観察できる。

また、

⑫(君に頼みたい)用事があるから、帰らないでくれ。

⑬(自分に)用事があるからといて帰らないでくれ。

⑭(自分に)用事があるからといて来ないようでは困る(注4)。

などの例を見ると、「～からといて」(II A類)は、そのかかりが、常にそうだとは言えないにしても、助動詞の「ない」にまで及ばず、その前の用言に受け止められ得るものであることが分かる。一方、「～から」には、もちろんそのようなことはない(注5)。

「からといて」(II A類)には、それなりの存在理由があるというべきだろう(注6)。

四

次に、II AB類について見てみる。例えば、

⑮窮屈だからと云つて、隣の奴にどいて貰ふ訳にも行かず、(夏目漱石「吾輩は猫である」)

という文の場合、

○窮屈だからと云つて、隣の奴にどいて貰ふ訳にも行かず、

○窮屈だからと云つて、隣の奴にどいて貰ふ訳にも行かず、

のように、その構造を二様に解釈することができる。前者は、「からといて」をII A類として解釈した場合で、その意味は逆接でなく、また、後続の語句に対するかかり方も浅く、連体語句の中に収まり得るものとなっている。後者は、「からといて」をII B類として解釈した

場合で、意味は逆接、かかり方は深く、連体語句中に収まらないで、文末(に準ずる箇所)にまで及んでいる。

⑯それだからといていつまでもこの小つぼけな離れに厄介になつてるわけにも参りませんので、(夏目鏡子「漱石の思い出」)

においても同様のことが観察できる。一般に、「～からといて～わけにはいかない」という形における「からといて」は、II AB類である場合が多いと言える。

「～からといて～まい」の形における「からといて」についても同様である。例えば、

⑰あたしたち、結婚したからとて、ご主人と奥様になるまいと話しあったこと覚えてらっしゃる。(「春の谷間」)

では、

○結婚したからとて、ご主人と奥様になるまい。

○結婚したからとて、ご主人と奥様になるまい。

のように、「～からといて(からとて)」のかかり方を浅深二様に解釈することができる。

「からといて」がII A類、II B類の二様に解釈される可能性のあるその他の主な形とその例を、以下に示しておく(注7)。

◇「～からといて～のは～」

⑱(略) そうだからといて、試みもせずあきらめるのは、自己に怠惰、相手に侮蔑というものだ、と、(略)(柴田翔「されど、われらが日々」)

◇「～からといて～ことは～」

⑲ほとくのやったことは死に値することです、しかし、だからといてほくが死ぬことは無意味だと思った。(大原富枝「巢鴨の恋人」)

⑳だからといてお前が泣くことはないだろう。(山本周五郎「武者草鞋」)

㉑しかし自分には大切でないからといて他人も同様であると考えことは誤りであろう。(河盛好蔵「人とつき合う法」)

◇「～からといて～必要はない」

㉒此方が気が立っているからって、お前までビクビクする必要はないじゃないか。(志賀直哉「邦子」)

◇「～からといて～ては～」

㉓安田君が舞台経験があるからといて、読み合せを真面目にやってくれなくちゃ困るよ。(福永武彦「忘却の河」)

◇「～からといて～なんて～」

㉔ただ御前の顔が少し許赤くなつたからと云つて、御前の言葉を疑ぐるなんて、まことに御前の人格に対して済まないことだ。(夏目漱石「行人」)

◇「～からといて～なくても～」

②⑥捕虜になったからとて自殺しなくてもいいだろうと思う人がいます。(「女性に関する十二章」)

◇「～からといって～ないで～」

②⑦こんなことを云ったからって、おれがやけになるなんて思わねえでくれ。(「さぶ」)

◇「～からといって～はしない」

②⑧でも、みさ子は女だから気の毒さ。男ならば、かりに妻があり子供があっても、勉強のために能率があがる高原に行ってたからって、若ちゃんのように憤慨されやしないだろう。(「春の谷間」)

◇「～からといって～わけではない」(注8)

②⑨(杉田屋の養子に)なり損ねたからって一生うだつがあがらないわけではなからう。(山本周五郎「柳橋物語」)

②⑩お断わり申しておきますが、ご息女を頂戴にまいったからとて昨日のお説に服したわけではございません。(山本周五郎「楯輿」)

このような形の文において「からといって」が二様に解釈される理由は、初め、例えば、

〔～からといって～〕わけにはいかない。

〔～からといって～動詞〕まい。

などのような構造の文として用いられていたものが、次第に、

～からといって、～わけにはいかない。

～からといって、～動詞・まい。

などのような構造のものとも意識されるようになったからではないかと考えられる。

このようなことが生じたことについては、これとは別に、

②⑪しかし化学的にこんな簡単なものができたとして、何のことがあろう。(『科学朝日』昭24.11)(注9)

②⑫どうなったって驚くものか。(山本周五郎「何の花か薫る」)

②⑬といてこのまま別れるのも、なんだかもったいなような気分になった。(山口瞳「結婚します」)

のような、「～とて」「～って」「～といて」などの形が既に逆接的な意味あいでも用いられていたことが、強く影響しているのではないと思われる。

今、一応ⅡA B類に分類されたもので、実際にはⅡA類として用いられたものをⅡA BのA類、ⅡB類として用いられたものをⅡA BのB類と呼んでおく。実際の用例には、そのどちらとして用いたものか判定しにくいものが少なくない。しかし、文中の他の言葉の使い方、句読点の使い方などによって大体推測できるものもある。例えば、

②⑭諸君は冷淡だからと云つて、決して主人の様な善人を嫌つてはいけない。(「吾輩は猫である」)

②⑮夜を徹したからといって武家ではそうむざと昼寝をすることはできない。(山本周五郎「日本婦道記」)

②⑯さもありませんと思われませんが、しかしだからといって、妻の愛情を証明するために弟に妻の貞操を試させるというのはどう考えても変である。(土居健郎「甘えの構造」)

などでは、それぞれ、「決して」という副詞の位置、「武家では」という題目の位置、「しかし」のあとに読点がないことによって、その中の「からといって」がⅡB類として用いられたものであると推測される。ただ、日本語では、語順や句読点の使い方などは絶対的なものではないから、これらの例も、ⅡA類の例ととられる可能性が全くないわけではない。

五

文の形は似ていても、次のような「からといって」は、ⅡA類と解釈される余地が全くないから、ⅡA B類とせず、初めからⅡB類とするのがよいと思われる。

②⑰ですから、若しあなたが友人や医者にそう言われたからとて、ちっとも気になさる必要はありません。(「女性に関する十二章」)

②⑱いかに世を捨てたからと云って、女の身でこのような淋しい所に暮らしてははしないであろう。(谷崎潤一郎「少将滋幹の母」)

②⑲私もしあなたを本当に欲しかったなら、いくら友人に相談されたからといってあとへはひかなかったでしょう。(山本周五郎「燕」)

これらの文では、逆接の意味を強調する用法の「もし(“仮に”の意の)」「いかに」「いくら」などが用いられていることによって、「からといって」を逆接の意味にとるほかに、また、②⑰では副詞「ちっとも」と、連体語句の中に収まりにくい「もし」の存在が、同様に②⑱では「いかに」、②⑲では「いくら」の存在が、それぞれの文を「〔～からといって～〕必要はない」「〔～からといって～〕はしない」「〔～からといって～〕ない」などの構造のものと解釈することを困難にしている。

②⑳～㉑だけでなく、ⅡB類の「からといって」をもつ文には、ⅡA B類の「からといって」をもつ文と形が似ているものが少なくない。例えば、

②㉒いままでいくら丈夫だったからって、もうそんな訳に行かないわ。(石川達三「四十八歳の抵抗」)

という文は、「～からといって～訳にはいかない」という形に従っているように見える。また、

②㉓いくらこの会社を受験したからといって他人ではないか。お前なんて呼ばれるいわれはない。(山口瞳「結婚しません」)

という文は、句点をはきんで「～からといって～い
われはない」という形を作っているように見える。

もちろん、

②だがね、つまらない人間だからって、その人生がつ
まらないか、どうかってのは、別のことなんだぜ。
(柴田翔「鳥の影」)

③自分が現在の生活に飽きているからと言って、それ
は彼女の罪ではない。(『四十八歳の抵抗』)

④外見が粗野だからとて心のやさしい人もある。(『日
本文法大辞典』「からとて」の項の用例)

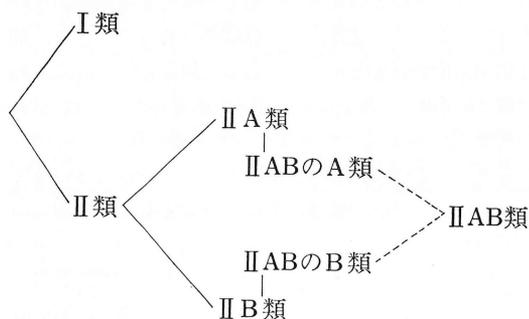
などのように、II A B類の「からといって」をもつ文と
余り似ていない文も存在しないわけではない。しかし、
このような文はどことなく不自然な感じがあり、現在の
ところ、数も多いとは言えない(注10)。

また、II B類の「からといって」では、理由の意味の
接続助詞「から」を用いる意味が、II A類の「からとい
って」の場合以上にあいまいになっている。ちなみに、
③⑦～④④などの「～からといって」を「～とい
って(も)」と言い換えても、意味の上で大きな違いが生じな
い。

このような点から見て、II A BのB類は比較的新し
く、それ以外のII B類はそれよりも更に新しく派生して
きたものではないかと思われる。

六

以上、「からといって」が幾つかの種類に分けて考え
られることを見てきた。これを図式化して示せば次のよ
うになるであろう。



このうち、I類とII A類、II A BのA類とII A BのB
類、II A BのB類とII B類とは、これまでに見てきたよ
うに、それぞれ境界があいまいで、いわば連続的であ
る。

これら相互の関係については、本稿の考察から、大体
次のような派生の道筋が考えられるのではないかと考え
る。

(一) I類→II A類

(二) II A類のうちII A BのA類の多用(注11)

(三) II A BのA類→II A BのB類

四 II A BのB類→II B類

これを数量的に跡付けることは今後に残された課題で
あるが、参考までに、今回の調査で明治以後の資料から
アランダムに抽出した「からといって」「からとて」
「からって」の種類別の用例数を示しておく。

| | からといって (からといって からと申して) | からとて | からって | 計 | |
|----------|------------------------------|------|------|----|----|
| I 類 | 6 | — | — | 6 | |
| II A 類 | 6 | 1 | 4 | 11 | |
| II A B 類 | 37 | 4 | 7 | 48 | |
| II B 類 | (1) | 11 | 2 | 2 | 15 |
| | (2) | 3 | 1 | 2 | 6 |
| 計 | 63 | 8 | 15 | 86 | |

注 II B類の(1)は形がII A B類に似ているもの、(2)は
それ以外のもの。

量的に十分なものでなく、また、種類の判定が個人に
よって揺れる可能性もあるが、これによって、大体の傾
向を知ることではできよう。

「からといって」「からとて」「からって」について
は、現在、逆接の意味を表すもの、本稿でいうII B類
(II A BのB類を含む)がクローズアップされがちであ
る(注12)。しかし、慣用句化の度合いの少ないI類はも
ちろん、II A類 (II A BのA類を含む)が一方で相変わ
らず有効に用いられている事実も、見落とすべきではな
いだろう。I類、II A類 (II A BのA類を含む)の存在
を正しく認識することは、II B類 (II A BのB類を含む)
の用法を理解する上でも欠かすことのできないこと
であるように思われる。

注

- この用例は、三上章『現代語法序説——シンタク
スの試み——』(昭和28年)から借用した。
- 「～から」も、その部分に意味上、音調上の強
勢が加わった場合は、連体語句の中に収まり得るも
のとなる。拙稿「「～から」と「～ので」のかかり
先について」(『国文学研究』第七十七集, 昭和57年)
参照。
- 前掲拙稿参照。
- ④⑤の「からといって」は、実は、後述のII A B
類であって、II A類、II B類のどちらとしても解釈
が可能であるが、ここでは、そのうちII A類として
解釈した場合の文の構造を示した。

5 三上章氏の前掲書、また『現代語法新説』(昭和30年)などの、かかり方の様式の分類に従えば、「～から」は硬式、「～からといって」は軟式又は単式ということになるだろうか。「～からといって」を軟式、単式のどちらととるべきかは大いに問題となるであろう。

6 水谷信子氏は、『日英比較 話しことばの文法』(昭和62年)の中で、英語の「because」と日本語の接続助詞「から」の相違に触れ、英文の

You shouldn't overeat it because you like it.
の日本語訳として適切なのは、

好きだから、食べ過ぎてはいけない。

ではなく、

好きだからといって食べ過ぎてはいけない。

であるということを描指しておられる。この二つの日本語文の違いも、「～から」とII A類の「～からといって」の働き(かかり方)の相違によるものと考えられる。

ちなみに、二つの文の構造を示すと、次のようになる。

好きだから、食べ過ぎてはいけない。

好きだからといって食べ過ぎてはいけない。

なお、II A類の「からといって」は、

久し振だからといふので、皆な大阪で降りて三沢と共に飯を食つたのださうである。(「行人」)
食事が終ると、女の客だからということで、桃代は彼に着替えさせ、髪を撫でつけたうえで客問へやった。(山本周五郎「わたくしです物語」)

などに見るような「からというので」「からということ」などと、いろいろな点で似た言い方であると言ってよかろう。

7 「からといって」がII A B類となる可能性のある文の形を、一般的な形で定式化したり、網羅的に示したりすることは難しい。ここでは、とりあえず、その主なものをごく大ざっぱな形で示すにとどめる。

8 この形では、「からといって」をII A類として用いた場合の文の構造は、

～からといって～わけではない

のようなものになるのではないかと考えられる。

ちなみに、例えば⑩について見るに、「からとい

って」をII A類と見た場合の文の構造を

～、〔ご息女を頂戴にまいったからとて昨日のお説に服した〕わけではございません。

とすると、理屈に合わないことになる。

この点、「～からといって～わけにはいかない」とは、形は似ているが、事情が異なるようである。

9 国立国語研究所報告3『現代語の助詞・助動詞—用法と実例—』(昭和26年)から再引用。

10 六参照。

11 このことについては、特に本文で触れることをしなかったが、四で示したように、その中の「からといって」がII A B類と解釈される可能性のある形の多いことを思えば、こう考えて少しも無理ではないであろう。

12 前掲 国立国語研究所報告3『現代語の助詞・助動詞—用法と実例—』は、接続助詞の「から」の意味・用法四項目の中に、次のような項目を立てている。

③理由となるべき事からを挙げていったん言いさし、帰結を言外に暗示する。さらに、それを「と」で受けて、その帰結から導かれる行動の叙述へと移る。(終助詞的な用法)

(例文略)

④「からといって」「からとて」などの形で、否定の意味の語と呼応し、逆説の条件となる。

(例文略)

そこに掲げられている実例から推測すると、本稿でいうI類、II A類はともに③に、II B類は④に、また、II A B類はすべて④に分類されることになるようである。日本文法講座6『日本文法辞典』(昭和33年)、林四郎『基本文型の研究』(昭和36年)60ページ、松村明編『日本文法大辞典』(昭和46年)などの扱いも、大同小異である。

なお、逆接の意味の「からといって」「からとて」などが否定の意味の語と呼応するというのは、事実と必ずしも一致しない。

(用例の仮名遣いは、漱石のものを除いて、現代仮名遣いによった)